

## 幼稚園における子育て支援活動の現状と課題（2）

○吉川 はる奈  
(埼玉大学)

西本 絹子  
(高崎健康福祉大学)

## 【問題と目的】

幼稚園が地域の子育て支援機関として、役割を求められ、さまざまな取り組みが着実に広がってきている。しかしひとくちに子育て支援活動といっても、同じ地域でも専門機関の違いで求められる役割は大きく異なるし、専門機関が同じであっても地域によって違いがあるなど実情と課題を個々に捉えていくことがより重要になってきている。

幼稚園という場の特性を活かしながら子育て支援を行う際に問題になること、また課題になることは何かについて多くの検討が必要な状況であると思われる。同じメニューを踏襲して異なる機関で実施されるのではなく、個々の専門機関の特性を活かした支援について考えていくことが求められているといえよう。

本論では報告（1）に引き続き、筆者らが子育て支援カウンセラーとして関わった幼稚園での支援活動を整理し、幼稚園における子育て支援活動の特性と課題について考察していきたい。

## 【方法】

## \*支援活動の背景

報告（1）と同様の自治体の子育て支援活動総合推進事業の一貫である。全体の概要については報告（1）と重なるので省略する。ただし、報告（1）と異なる地域で、人口の過疎化および幼児をもつ家族の減少が目立ち、同じ事業でありながら、求められる支援の方法は大きく異なった。子育て支援は地域にあわせて実施されるべきで、個々の親子の実情、個々の幼稚園での特性にあわせた支援を実際に相談活動を実施しながら調整していった。

本報告における幼稚園では、未就園児への園庭・園舎開放のニーズが高く、近隣の子どもたちが日常的な遊び場としてよく利用しており、そこでの子育て相談も含めた園全体の子育て相談を行うことが求められた。

## \*相談の流れ

年間10回、2年間で計20回の実施予定であったが、必要に応じて園の行事に参加したり、訪問を追加したりした。

9時～10時：クラスの中で保育の様子を観察
10時～11時：未就園児の園庭開放の場に参加
11時～12時：クラスの中で保育の様子を観察
12時～13時：保育者とカンファレンス

またその場の状況に合わせて参加したので、未就園児の園庭開放の場に長く参加する場合もあれば、事前に予約を取った方の相談を別のクラス室で行うこともあった。

廊下で母親と立ち話のなかで相談を行ったり、園庭で子どもが砂遊びをする場に居合わせながら相談を受けることもあった。

終了後は毎回、保育者とカンファレンスを行った。

## 【結果】

2年間の相談の内容を、「相談のきっかけ」、「相談の経過」、「相談の継続性と終結」、「保育との関係」という4つの視点から整理し、検討した。

## 相談のきっかけ

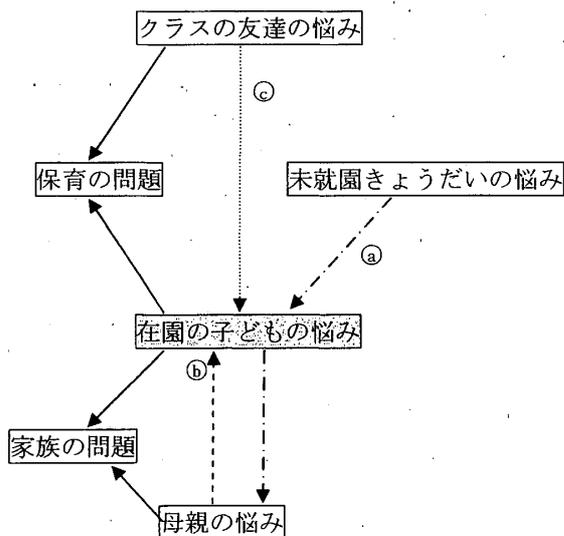
- ① 在園児に関しては、当日朝、保育者から気になる子の様子を相談される場合や子どもの様子を見ながら筆者が気になることを尋ねることが多かった。
- ② 未就園児への園舎開放では子どもの姿を見ながら母親と話をしている中で母親の側から悩みを出し、相談を求められることが多かった。
- ③ 在園児でも未就園児でも園長や担任を通して時間を事前に予約して相談を求められる場合もあった。
- ④ 学期末に保育者から悩みとしてカンファレンスの中で出てくることもあった。

### 相談の経過

相談の経過における問題の変化を図1に示した。

- ① 未就園児の園庭開放を利用しているのは近所に住む子どもと保護者であるが、在園している児童のきょうだいも多い。利用者の未就園児の相談がきっかけとなり、在園するきょうだいの問題や悩みに移行あるいは母自身の悩みに移行していくことが目立った(図1の㉑)。
- ② 母自身の悩みがきっかけとなり子どもの悩み、家族の問題に移行していくこともあった(同上㉒)。
- ③ 近所の子どものお話がきっかけとなり、在園する自分の子どもの悩みに移っていくこともあった。
- ④ 在園するクラスの友達の話がきっかけとなり、やはり在園する自分の子どもの悩みに移ることも多かった(同上㉓)。

図1 問題の変化



### 相談の継続性と終結

- ① 保育者からの相談は保育終了後に簡単なカンファレンスをしながら次回に経過をやりとりする形ですすめられた。学期末の全体カンファレンスの中でその経過について保育者全体でも確認があった。
- ② 未就園児の場合には日常生活内での小さな不安や相談が多く、その場で一応の解決をするものが多かった。しかし日常的な遊びの場として利用している親子がほとんどなので次回に顔をあわせるときにその後の様子をこちらから無理ないように尋ねるようにし、必要あれば相談をうけた。

- ③ 毎回小さな相談を重ねながら自分の子どもの発達を確認している親もいた。

### 保育との関係

- ① 未就園児の相談をきっかけとして、在園するきょうだいとの関係に移行していくような場合には、保育中での子どもの様子に関わってくる。保育者との情報交換やクラスでの子どもの様子を母親に伝える仲介役となり、相談を行った。
- ② 保育者からあげられたクラスで気になる子どもの相談では発達の偏りの問題も含まれている可能性から、カンファレンスで子どもの発達の特徴を確認しながら保育の方向性について検討があった。また、学期ごとの全体カンファレンスでも検討課題として継続していった。

### 【考察】

幼稚園における育児をめぐる相談、子育て支援としての相談の役割は単に、「親の悩み相談」とか「在園する子どもの相談」など狭い視点で受け入れていくことでは問題が解決に結びつかないと思われた。個々の問題がきょうだい、家族の関係を超えてクラスや地域の問題にも影響を与えることも考えると、小さな相談の結果も保育に活かすことが可能で、この点では地域の未就園の子どもの問題も保育の問題につながってくるという視点をもつことも重要であろう。しかし小さな相談も活かしていくという視点は、何でも相談を受け付ける抱え込みが生じる危険性もはらんでいる。必要に応じて適切な場につながることも大切になろう。

さらに悩みや相談という形ではなく定期的な子どもの成長の確認を求められることも多かった。具体的には子どもの成長を言語化し、母親の安心感につなげていくことである。母親が子どもの発達を実感できる場としても役割を果たしているといえよう

幼稚園における子育て支援のありかたは、同じ自治体の中でも地域により、またそこに在園する子どもを取り巻く家族や近隣の子どもたち、家族の状況によっても大きく異なっていた。

その意味で、地域の実情と声を受け止めながら保育に活かしていくことが改めて重要であると感じた。また、地域で作る子育て支援ネットワークを利用することとともに、子育て支援活動を行いながら実態に合わせて調整していく柔軟性も必要だと思われた。